清末日本語教育史の研究

－教科書と学習書の分析を中心に－

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D143777

氏　　名：魏　維

日清戦争を境に、清国国内の状況が大きく変化した。言語生活の面での大きな変化は日本語教育の実施であると言える。台湾において、日本語（国語）教育は同化政策の一つとして行われるようになった一方、清国本土では、自主的自発的に日本語を学び始めた。本研究の目的はこれまでの研究で看過されてきた清末の日本語学習活動を近代日本語教育の一部を成す存在であると位置づけた上で、言語教育の視点から当時の日本語教育の実態を探ることである。この目的のために、本論文は清末に行われた日本語教育を「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」、「独学の日本語学習活動」という４つの類型に分類し、それぞれで使用された日本語教科書・学習書を考察した。

第一章では、まず清末日本語教育に関する研究の現状を整理した。ほぼ同時期に始まった台湾における植民地の「国語教育」と比較しながら、これまでの研究では清国本土で行われた日本語学習活動が看過されてきた理由について分析した。清末における日本語教育の存続期間が短かったため、未熟なままで終わってしまい、結果として大きな成果に辿りつかなかったことなどが考えられる。これらの分析を行った上で、中国語母語話者の立場で独自の学習方法を編み出して試行錯誤を繰り返し、よりよい方法を求めて実践されてきた清末の日本語学習活動も、近代日本語教育の一部を成す存在であり、貴重な歴史の一頁であると位置づける。

第二章では、清末の日本語教育を「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」、「独学による日本語学習活動」に分類し、多様な日本語学習活動が行われた背景や内実を説明した。さらに、この分類に基づき、当時刊行された日本語に関する複数の教材の中から、現時点で実際に日本語学校において教科書や独学向けの学習書として使用されていたことが判明しているものを取り上げる。具体的には、清国本土の日本語学校教育を代表する教科書として『日語入門』と『日語独習書』、清からの留学生向けの日本語教科書『日本語教科書』、近代的な学校における日本語教育を代表する教科書『日語読本』と『東文法程』、合わせて５種類を研究対象とする。さらに、学習書として『和文漢読法』と『寄学速成法』を研究対象とする。

コミュニケーションを目的とする今日の言語教育と異なり、読書・翻訳を目指す清末の日本語教育において、音声教育に対する観念や教育方法がいかなる形で行われていたのかを究明する必要がある。第三章では、言語教育の視点から、「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」の３つで用いられた日本語教科書を手掛かりに、清末日本語音声教育の実態を探った。その結果をまとめると、次のようになる。清末の日本語教育は主に初心者向けの言語教育であり、教育内容は五十音図から始まる。漢字を用いる反切法や直接表音法が表音表記として使

われていたことが明らかになったが、これらの教育方法は必ずしも日本語の発音を正確に教えているとは言えない。また、編集主体の異なる教科書間で音声知識の説明が相違していることは、清末における日本語教育の多面性を示す一方で、教育内容の統一性に欠ける一面も読み取れる。本研究で取り上げた教科書を分析すると、当時の日本語音声教育ではアクセントにはほとんど触れられていないことがわかった。

第四章では清末に編集された日本語教科書に用いられている文法教育の方法について言語教育の視点から検討した。文法教育は清末の日本語教育においても中心的な課題として重視されていたことがわかる。教科書ごとに強調される文法知識が異なっており、学習者に対して和漢訳、日本語の運用能力、読解力などの習得を求めていた。各教科書で取り扱われる文法事項は様々であり、当時文法教育に対する認識に不一致のあったことがわかる。現代日本語教科書と異なり、当時の教科書はほとんど練習項目を配置していなかった。また、学習の難しい使役表現、受身表現、動詞の活用などに関する知識は今回取り上げた教科書ではほとんど見られなかった。これはこれは模索期にある清末の日本語教育においては日本語の文法体系がまだ整っていなかったという一面を反映していると言える。

第五章では、独学向けの学習書として使用された『和文漢読法』と『寄学速成法』を比較しながら独学による日本語の短期習得法を音声、文法という２つの側面から考察を行った。考察の結果、以下のようなことが明らかになった。清末の独学による日本語学習活動は短期間で日本の新聞・雑誌・書籍（多くが漢文書き下し文）を読解するという要望に応えるために始まったため、日本語の読解力が強調された。その一方で、日本語の文字と音声が分断され、音声教育が軽視される傾向があった。また、『和文漢読法』、『寄学速成法』などの学習書を分析すると、短期習得法では日本語が漢字と仮名文字に分けて論じられていることがわかった。日中両言語には漢字の使用という共通点があるため、仮名文字の教授に主眼が置かれていた短期習得法は、文法知識に関する説明が限定的であり、また、言語運用能力への配慮に欠けていたと言える。

第六章では、各章の分析で得られた結果を総括しながら、清末日本語教育の特徴について考察した。まず、中国語の反切法、直接表音法などの言語知識を借りて日本語を教えていたことが挙げられる。それは日本語教育の蓄積のない時期に試行錯誤の末に案出された方法だと考えられるが、当時の教育関係者が教育方法に創意工夫を加えていたという側面も読み取れる。次に、清末の日本語教育は日本の歴史や文化、風土習俗などの知識に関する教授に至らず、発音、語彙、文型などの言語知識に止まっていた。このような教育知識に専念していたのは清末という時代の日本語に対する需要に応えた結果であると言える。また、当時、学習者側には日本語の読解力のみを身につけたいという要望が顕著であったのに対し、教育者側は日本語を正確に教えることを旨としていた。つまり、清末日本語教育では学習者

側と教育者側の意識が二分化していたと言える。

第七章ではこれまでの分析と考察をまとめ、今後の研究課題と研究の展望について述べた。